

受験番号

2018年度

神戸国際高等学校入学試験

国語

(2018年2月10日実施、試験時間50分、100点満点)

(注意)

1. 解答用紙と問題冊子の両方に必ず受験番号を記入してください。
2. 全ての問題に解答してください。
3. 解答は全て解答用紙に記入してください。記入方法を誤ると得点にはならないので、十分に注意してください。
4. 試験終了後、解答用紙と問題冊子の両方を提出してください。



□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。解答に字数の指定がある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。(設問の都合上、本文に一部表記を改めたところがあります。)

われわれには①二つの相反する能力がそなわっている。ひとつは、与えられた情報などを改変しよう、それから脱出しようという拡散的作用であり、もうひとつは、バラバラになっていくものを関係づけ、まとまりに整理しようとする収斂的作用である。

かりに十人の人に、三分間の話をするとする。あとでその要約を書いてもらう。結果はAに違っているはずだ。まったく同じまとめになることはまずない。こういう場合は「正解」はない、ことになる。正解とは、全ての人がほぼ同じ答えを示しうる場合でないと考えられない。数学には正解があるけれども、右のような要約では正解は存在しない。おもしろいもの、よくまとまったものがある。②これが唯一という正しい答というものはあり得ないのである。

正解の存在しないのは、なにもこういう要約に限らない。試験などでも記述による答案ではすべて厳密な意味での正解はない。各人各様に異なった形の答になっている。数学の正解ではまったく同一の複数ものを許容するけれども、主観によって答の違うものについて完全な同じものがあるてはならない。裏から言えば誤解はきわめて個人的であって、まったく同じ誤解というのはまず考えられない。

要約をするには、その「誤解」の根になっている拡散的思考がはたらいっている。したがって、一字一句違わないものが二つあるのは理論上は考えられないことになる。

③そういう理論上あり得ないはずのことが、現実にはおこっているというからおもしろい。このごろ、入学試験で小論文という作文が課せられているところが多くなってきた。題を与えて文章を書かせる。これは収斂しないはずである。正解の文章なんてあるわけがない。めいめいが自分の考えを出すことを求められているわけで、

もつとも自由活潑に拡散的思考の力をハツキできる。個性を見るのに、たいへんよいテスト方法だとされて、近年注目されてきたのは肯ける。

ところが、おどろくべきことに、試験の採点当事者の言うところによると、④ほとんどが同じ事を書いているそうである。はじめて聞いたときはとうてい信じられなかった。いくらなんでもそんなはずはない、と思つたのである。

ところが、あちらでもこちらでもそういう声をきく。高等学校では大学入試に備えて小論文のbモギ試験をする。そこでも同じ現象が見られるという。どうやら、これは※誇張ではなく、現実なのであろう。おそらく、指導が効果をあげすぎて、与えられたことをそのまま書けば、それが正解になると勘違いしているのかもしれない。小論文にも数学と同じような答が求められていると考えるのだったら、たいへんな誤解である。

もちろん、作文の文章である。一字一句まったく違わないということはあるまい。しかし、言わんとするところがまったく同じであれば、収斂的思考によつてのみ文章を書いたことになる。そういう文章からは個性を読みとるのは不可能であろう。

人間はもともと、つよい拡散作用をそなえている。昔の軍隊で※逡伝ということをした。通信手段が未発達な時代においては、移動する部隊同士のコミュニケーションは口伝によつた。部隊の間隔の間隔の中継点の兵を配置する。メッセージはそれによつて次々送られる。

B、このメッセージが正確に終着点へ届かない。かならずなにかしかなの変形をおこす。誤伝になる。いざという場合、それではいけない。それで日ごろから逡伝の訓練が行われたのだが、それでもなかなか正確な伝達は得られない。

この場合、各人は正しく、正しくと心掛けている。それなのに、拡散作用がしのび込んで、メッセージを化けさせる。それがさらに次の中継点で変化し、だんだん大きくずれたものになって行く。

この化け方がもっと自由奔放になると、「尾ヒレ」と呼ばれるものになる。※デマとか※風聞、噂といったものは、この拡散化作用

の程度が大きくなったときに見られる。デマは、見方によれば、自由な解釈にもとづく伝達の花だということにもなる。われわれはだれでもデマの。二つ手となる資格をもっている。

拡散作用によって生れたものは、散発的である。線のようにはまとまらないで、点のように散っている。点と点は一見、相互に関係がないように思われる。

これと対照的なのが、収斂性による「整理」である。まず、整理には、焦点が必要である。目標に向ってすべてのものを統合する。その方向がはつきりしていないと、まとめをすることができない。

これまでの学校教育は、主として収斂性による知識の訓練を行ってきた。これには、いつも正解が予想される。満点の答案がある。長い間学校教育を受けていると、すべてのことに、正解があるのだというようなdサツカクにおちいるのは、収斂能力だけを磨かれていくからである。

そういう頭で、満点の答のない問題に立ち向うと、手も足も出なくなってしまう。自分の考えを打ち出すことはできないが、教えてもらった知識を、必要に応じて要約するのは。タクみであるという学習者が優等生として尊重される。

拡散的思考の生み出すものは、まとまりのつかない点のようなものになると言った。それを放っておいては、とんでもない混乱になってしまうのではないかと、収斂派は心配してきた。拡散派にしてもデータラメに勝手放題なことを考えているのではない。一見いかにも混乱のように見えても、充分に多くの点をとってみると、おのずから収斂に向っているのである。

C、新しいことばがあらわれる。人々はめいめい勝手なつかい方をする。拡散的使用である。収斂したくとも辞書の定義もない。ところが、ある歳月がたってみると、そのことばの意味はおのずから定まっているのである。拡散的思考がおのずから収斂しているみごとな実例である。

もし、拡散のみあって収斂することを知らないようなことばがあれば、それは消滅する。

(外山滋比古 「思考の整理学」)

※誇張・・・実際よりもおおげさに表現すること。

※通伝・・・人から人へ、また宿駅から宿駅へ順々に送りつぐこと。

※デマ・・・根拠のないうわさ話。

※風聞・・・うわさとして伝え聞くこと。

問1 | ①「二つの相反する能力」とありますが、これは何を指していますか。文中から五字以内で二つ抜き出しなさい。

問2 | Aに入る四字熟語を漢字で答えなさい。

問3 | ②「これが唯一という正しい答というものはあり得ないものである。」とありますが、それはなぜですか。最も適切なものを次のア〜エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 正解とはすべての人がほぼ同じ答を示しうる場合でないと考えられないので、要約でも数学においても、複数の解答が存在するから。

イ 要約は考え方や表現のしかたが画一的ではなく、各人各様に違った形になり、全く同じまとめになることはまずないから。

ウ 要約の正解は、おもしろいもの、よくまとまったものに限られるが、その基準が曖昧であるから。

エ 要約は、収斂的思考によってのみ書かれるべきであり、拡散的思考による文章は正解と認められないから。

問4 | ③「そういう理論上あり得ないはずのこと」とは、どのようなことを指していますか。「主観」「正解」という言葉を使って、四十字以内で答えなさい。

問5 | ④「ほとんどが同じ事を書いている」とありますが、筆者はそうなる原因をどのように推測していますか。それがわかる一文の最初の五字を文中から抜き出しなさい。

問6 この文章で筆者が主張している内容を説明したものとして最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 拡散的思考はまとまりがなく、混乱を生み出すものなので、試験の小論文の答が一定になるのは喜ばしい現象である。

イ 学校教育においては収斂的思考の訓練が中心だが、個性を育てるためには混乱をもたらしても拡散を続けることが望ましい。

ウ 私たちの思考は、一見自由奔放に拡散を続けたとしても、やがて自然と収斂に向かっていくという過程を経るものである。

エ 収斂的思考の訓練には、満点の答のない問題を与え、どんな答が求められているのかを考えさせる方法が有効である。

問7 、に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア B || そのうえ C || けれども

イ B || それゆえ C || つまり

ウ B || あるいは C || なぜなら

エ B || ところが C || たとえば

問8 || a く e のカタカナの語を漢字で答えなさい。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。解答に字数の指定がある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。(設問の都合上、本文に一部表記を改めたところがあります。)

ほぼ六週間ぶりで勇が竹刀を手にして練習に臨んだとき、まず初めに田端の①著しい成長に眼を瞠みはった。中段に構える姿勢に落ちつきが出ていた。気合いを掛けて突っかけてもそれほどあわてることなく、相手の動きをじつと見ている。自信が出てきたな、と思つて勇がふと気をゆるめた隙すきに、※小手を狙ねらわれた。かろうじてはししたが、不意をつかれたため、反撃はできなかつた。

一学期の間は、部をやめようかどうしようか迷っていた田端が、夏を越すと、aとたん劍士になったことに、勇は驚きを越えて、②畏怖おそすら感じていた。一本がはずされてもためらうことなく、二段、三段と打つてくる。※胴を抜いても、③頓着とんちやくすることなく、※メン、メン、と叫んでくる。何本勇がメンを取り、ドーを入れても、無邪気とも思える元気で突っかかってくる。とうとう練習から遠ざかっていった勇の方が④あごを出して、打ち合いを中止した。勇が三本とると、田端は確実に一本取り返してきた。それまで、田端の竹刀が正確にメンをとらえたことなどなかつたのだ。

「どうしてそんなに強くなつたんだ」  
その日の練習が終わつたあと、水道の蛇口じやくちうの下に足を突き出して洗いながら、勇は田端に聞いた。

「合宿で鍛たくえられたから」  
と田端はいった。少女のように瑞々みずみずしい頬をしていた。

「はじめは合宿に入るのがこわくてさ、どうせ続つきっこないし、弱いしき。でも、やっているうちに慣れてきて、なんか日常みたいになつてさ」

「日常？」  
奇妙な言葉を聞いたような気がして、勇は訊きき返した。田端は少しもつた。

「いや、その、練習するのが日課にっくになって、どうせなら、小林のいないうちに強くなつて驚かせてやろうと思つたんだ」

「驚いたよ」

「小林だけだもんな、合宿不参加を許されたのは」

「旅行は前からの予定だつたんだ」

「おれだってそんな予定作つくりたかつたさ。でも、bだめだつていわれるに決きまつているし、部をやめるのも、しゃくだし。弱よいからつて部をやめたら、本当に弱よくなつちやうものな」

「おまえ、なんか⑤すぐすぐくなつたな」

勇の言葉を冗談にとつたのか、田端は朗らかな笑い声をたてた。十日間の合宿と、夏休みの間ほぼ毎日続いた稽古けいこに、田端は一度も休むことなく出てきたと勇は聞いていた。中学生のときには特別に何のスポーツもしていなかつた彼に、毎日の生活の中で剣道が。単なる運動以上の重味をもつてきたのだろうと勇は思つた。

⑥旅たびに出る前まで、勇は不思議ならだたしさを感じていた。このまま外に出ることなく、高校の体育館の中でずつと過ごしては、d永久とこにほかの人間たちと話す機会をもてなくなるのではないかと考えたりした。

そんな考えを持ったのは初めてではなかつた。小学校では、毎日同じ数の生徒の中で、そのうち数名とだけしか会話をもちえないことを残念がってみたり、中学生になると、家に帰ってから、学校やその途中にある街角に、e大きな落おとし物や忘れ物をしてきたのではないかと感ずることもあつた。今日は、級友以外ではパン屋の親父と話しただけと思ひ出したりして、自分の胸の中に描かれた世界が、日を追うごとに狭せままつていくような気がしていた。

旅は勇の目を外に向け、今まで知りようもなかつた人々と出会う一つの機会を与えてくれた。道端に佇たたずむ老人の訛なまりの混じつた言葉から、彼の生きてきた証あかししを読み取り、また、それを見つける自分の感性を知ること喜びの一つだつた。未知の土地の人が生きていることを知ることだけでも、勇は自身が息づいているのに気付くことができた。

放射線状に人の群れに向かつて関心が伸びていくにつれ、勇は⑦芽生えはじめた自分だけの眼差しをますます大事にする気持ちが強つよまつた。他人に眼を向けることに夢中になり過ぎて、いつの間

か他人に同化し、自分が溶けてしまうことを恐れた。地べたを這うようにして生活してきた人々の生き方の強さを見ても、決して侵されることのない、自分の胸の内にある心棒を太く強く育てることの必要を感じていた。

十五歳の勇にとって、⑧剣道をしている最中に感じる緊張感がこの世で最も信用できることの一つに思えた。剣道が単なるスポーツであると割り切つてはいても、それから得たものは忘れ難く思え、たとえば今まで感じていた孤独感や甘えた心から出ていたものだと、いった幼稚な発見ではあっても、勇にしてみれば大事なことだった。

勇は一人ぼつねんとして、勇にしてみれば大事なことだった。勇を楽しむ余裕はない。孤独な人だと自分をなぐさめるのもおかしい。剣道をやりはじめて、一人でいる自分の中に没頭することを覚えたのは、小さな収穫でもあった。三尺の間合いをとって見知らぬ相手と対峙しているとき、他人を頼りにできない苦痛と不安と共に、ごく平凡な孤独感以上の、透明な孤立感を覚える。それが勇を剣道に向かわせる。にせものではない、現実の勇にとっては、それが本当の自分だけの、他人につけ入る余地を与えない、世界だった。旅先で、たとえどのような厳しい自然条件の中で生きている人を見ても、勇は胸の底に氷のつぶのように芽生え始めた自分の世界が脅かされることはないと思った。

夏の合宿に出ないことは、剣道の技術を伸ばす大切なチャンスを失うことを意味した。だが、勇にはもう一つの不安があった。決められた相手と練習を積むだけでは、剣道が上達する以前に、剣道という運動に狎れ合ってしまうのではないかと思ったのだ。それでは剣道をしているときに感じる孤立感すらも、全ての計算と予定のうちには生まれ、狎れ合いのうちに慣れきったゆるみのあるものになってしまうと恐れた。そうなるに剣道すらも勇の日常にとつては家や学校に対する気晴らしの道具にしかならなくなってしまう。高校生は勇から剣道をとつてしまうと、自分の世界を覗き込む心棒がなくなり、何をよりどころに他者やその人生を判断したらよいのか分からなくなる。先輩たちの冷たい視線を受けながらも旅に出たのは、未知の人と会いたいと思うことと共に、馴染んだ学校の剣道から離

れてみたいという勇のわがままが働いたためだ。

(高橋三千綱 「九月の空」)

※小手・・・剣道で、手首と肘の間を打つ決まり手。

※胴・・・剣道で胴の部分に打つ決り手。「ドー」も同じ。

※メン・・・剣道で決まり手の一つ。顔につける防具の上部を打つこと。

問1 || a s eの中から形容動詞であるものをすべて選び、記号で答えなさい。

問2 | ①・②・③の意味として最も適切なものをそれぞれ次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

① 「著しい」

ア すばらしい      イ 目立った  
ウ ひどい          エ ひそかな

② 「畏怖」

ア ひたすら尊敬すること。  
イ かもし出す威光に驚くこと。

ウ ビクビクと臆病になること。

エ 威圧され、ひるむこと。

③ 「頓着する」

ア こだわること。  
イ 少しも気にかけないこと。

ウ 気づかないこと。

エ 勝敗を気にすること。

問3 | ④ 「あごを出して」とありますが、「あごを出す」という慣用句が表す意味を答えなさい。

問4 | ⑤ 「すぐなくなった」とありますが、この「勇」の「田端」に対する見方を別の表現で表しているところを傍線部より前の文

中から探し、十字以内で抜き出して答えなさい。

問5 ー⑥ 「旅に出る前まで、勇は不思議ないらだたしさを感じていた」とありますが、この「いらただしさ」はどういう心情だったのですか。それがわかる部分を次の段落の文中から四十字以内で探し、最初と最後の五字を答えなさい。

問6 ー⑦ 「芽生え始めた自分だけの眼差し」と同じ内容を指す表現を文中から十二字で抜き出して答えなさい。

問7 ー⑧ 「剣道をしている最中に感じる緊張感」とありますが、これを別の表現に言い換えるなどのようになりますか。文中の言葉を使って、三十字以内で答えなさい。

問8 この文章で描かれている勇の人物像として、最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 今のままの自分ではだめだといういらだちを感じながらも、状況を打破する手段をもてずにいる、やや決断力に欠けた人物。

イ 自分を客観的に見つめ、他者との優劣を判断する冷静さをもつ一方で、プライドの高さゆえそれを認めることができない人物。

ウ 向上心が高く、自分を成長させるために周囲との関わりを一時断つこともいとわれないような、強さと大胆さを持った人物。

エ 孤独を求めて友を拒絶する一方で、未知の土地の人々との関わりを切実に求めるような人なつつこさも兼ね備えている人物。



ア 北叟ほくそうといふ翁      イ かしこく強き馬  
ウ 聞きわたる人      エ 翁が子

問5 Ⅱ a・bの読みを現代仮名遣いで答えなさい。

問6 Ⅰ⑨「このなか」とありますが、「こ」の指示するものを文中から四字で抜き出しなさい。

問7 本文の内容と合致するものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 翁に子どもが生まれた時には、普段から親しくしていた人々がお祝いにやって来た。

イ 翁はたくさんの馬を有効に活用し、暮らしむきはとても裕福であった。

ウ 突然、国に戦が起こって、国中の男という男たちはみな戦に行き死んでしまった。

エ 翁の子どもは家にいた馬に乗り、けがをしたので戦で死なずにすんだ。

問8 本文は鎌倉時代に成立した説話、『古今著聞集』からの出典です。成立年代が鎌倉時代ではないものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 徒然草      イ 方丈記      ウ 平家物語      エ 枕草子